

観光文化

Tourism & Culture

VOL.
198
2009 November

財団法人日本交通公社

特集◎ 平城遷都 1300 年 — 日本の歴史と未来を考える

◆巻頭言

平城遷都 1300 年祭に寄せて 平山 郁夫……①

◆特集

● 東大寺大仏と東アジアの平和 保立 道久……②

● 正倉院宝物と大仏

— 聖武天皇・光明皇后の愛と悲しみ 西山 厚……⑥

● 「平城遷都 1300 年祭」の開催に向けて

— はじまりの奈良、めぐる感動 福井 昌平……⑨

● 「なら国際映画祭」を通じて

奈良の魅力の世界に発信 河瀬 直美……⑭

◆視点

● MICE 推進アクションプラン

— 都市・観光地と MICE のかわり方 朝倉 はるみ……⑱

◆連載

I あの町この町 第36回

三叉路の知恵 — 長崎県佐世保市 池内 紀……⑳

II 風土燦々㉑

町住みのリアル・ハンター（後編）— 静岡県浜松市天竜区 飯田 辰彦……㉒

III ホスピタリティーの手触り 57

インターネットと宿 山口 由美……㉓

◆新着図書紹介……㉔



つるし柿・甲州市

東京から山梨県へ向かう中央自動車道の笹子トンネルを抜けると、風景が一変する。ブドウ畑や桃畑が広がる、見事な光景が目に見え込む。それぞれの果物が熟れる季節には、フルーツ街道の向わきに軒を連ねる摘み取り店に色とりどりの香り豊かな果物が並び、味覚を誘う。今回お伝えする「つるし柿」の里は、塩山市(現・甲州市)三日市場である。大木にたわわに実った柿が秋の深まりを告げる。

取材に訪れた時、棚干しに余念のなかった雨宮常邦さんは、「柿を一つひとつもぎ取る作業から始まり「すべてパートを頼り、つるし柿の皮むきをする」と言う。一連に三十五個をつり下げて、四十五日間のつり干しをし、次に棚干しを十二日くらいで完成させる。雨が敵なこととは言ってもない。「甲州百匁吊るし柿」の銘柄で大都市圏に出荷する。一冬四下りもの出荷で、「苦労するのは小豆色に仕上げねばならんことで手が抜けない」と雨宮さんは語る。味覚の裏に大変な努力と苦労のあることが感じられる。

(写真・文 樋口健二)

巻頭言

万葉の歌人・小野老は赴任先の大宰府で遠い都を想い、誇らげに

「あをによし 寧楽の京師は 咲く花の 薫ふがごとく
今盛りなり」

と歌い上げました。この都こそ平城京です。持統女帝に続く三人の女帝が君臨したのも、この都です。その意味では平城京は、日本史上では特異な都だったかもしれませんが。しかし、人々は国造りに燃えていました。中国をはじめとする大陸からの文化を取り入れ、これを消化・吸収し、新たな国家の基礎とすべく努力していったのです。その裏にはさまざまな人間ドラマがありました。そうしたドラマを見つめてきたのが、東大寺であり、薬師寺であり、唐招提寺など今日に残る古寺です。歴史の証言者たる古都の寺院は一九九八年にユネスコによって世界遺産とされています。

私は戦後間もない一九四七年に東京美術学校（現・東京藝術大学）に入学しました。当時は、せきを切ったように押し寄せてきた欧米文化の波に誰もが翻弄されていました。質量ともに圧倒的な力を誇る外국의文化の前に自己の行く先を見失っていたとも言えるでしょう。美術の世界も例外ではありませんでした。

平城遷都 1300 年祭に寄せて

財団法人文化財保護・芸術研究助成財団 理事長

平山 郁夫

このような世情のなか、二年生の時に研修旅行で私は初めて奈良を訪れました。古寺の境内の超然とした静寂なたたずまい、そこで仰ぎ見た御仏の御姿は歴史の語り部としての矜持そのものにも見えました。飛鳥、天平、白鳳の仏教美術の粹に接し感銘した私は、祖先の築き上げた美意識を継承し、それを発展させ後世に伝えることこそ自分たちの使命だと思っただけです。すべてが今では懐かしい思い出ですが、若い駆け出しの画学生に奈良が大いなる勇気を与えてくれたのは事実です。

その奈良で「はじまりの奈良、めぐる感動」を合言葉に古の都をしのぶ祭典が開かれます。私も日本の礎を築いた祖先への敬意を込めて、今から祭りの輪に加わることを楽しみにしています。しかし、祭りの華やかさに浮かれてばかりはいられません。開発という名のもとに進められる破壊、年とともに進む文化財の風化や劣化……等々、古都の抱える問題は山積しています。平城京遷都千三百年という記念すべき年にあたり、私たちは叡智を出し合い、この難問に取り組むべきだと思えます。

私自身、おののきにも似た感情を持って古寺の御仏に接した画学生の気持ちに戻り、奈良へまいりたいと思っています。

(ひらやま いくお)

平城遷都千三百年

日本の歴史と未来を考える

明年、藤原京から「奈良・平城京」に遷都して千三百年を迎えます。奈良では今年末から来年一年間、「平城遷都1300年祭」として記念イベントが予定されます。今号では、「平城遷都千三百年——日本の歴史と未来を考える」をテーマに、東アジアと交流した国際都市・平城京の歴史と文化を振り返ると同時に、未来に伝えるさまざまな取り組みを紹介します。

東大寺大仏と東アジアの平和

東京大学史料編纂所 教授

保立 道久

はじめに

東大寺の二月堂への参道を上がった所に手向山八幡宮がある。八幡宮の社官は紀氏の系統で、私は、有名な重源上人が紀氏の流れだといわれていることは、それに関係しているのではないかと考えている。上人が源平合戦で焼失した大仏の姿に衝撃を受け、復興と平和の象徴としての大仏再建に尽力した方であるの言うまでもない。東大寺の所蔵する上人の彫像は、大事業を

完遂した方にふさわしく、洪面の、しかし、いかにも信頼に値するという風貌を持つもので、私は、この彫像を思い起こすたびに、何か励まされるような感じがする。

上人は、何度か入唐した国際経験豊かな高僧である。今風に考えると、そのような高僧と神社の関係はよく理解できないかもしれない。しかし、手向山八幡宮に残された記録によると、そもそも東大寺大仏は聖武天皇が伊勢大神宮に祈請をこらし、人々を教え勧めて建立したものだという。

聖武天皇の伊勢行幸

東大寺は創建以来、伊勢神宮と深い縁を持つと考えられていた。実際に、重源上人は大仏再興事業の成功を祈って伊勢に参籠している。また室町時代には伊勢神宮の神木によつて作られた大國天が東大寺の油倉に祭られたことが知られる。それは東大寺の食堂再建を志した僧侶が、霊夢を見て伊勢に参詣し、伊勢神宮の禰宜に伊勢大神と大國天が「同体」であると教えられて刻ん

だものであるという。この僧侶が靈夢を見たのは、重源上人の指揮の下で大仏の再建鑄造に携わった唐人・陳和卿の旧居に夜居していた時であるというのも、意味深長な話である。

このような由緒は、聖武天皇が大仏建立の発願を七四〇年（天平十二年）の伊勢行幸の中で固めたことと関係している。つまり、聖武は、この年二月、河内国知識寺の廬遮那仏を見て大仏の造立を發起し、十月末、平城京を離れて伊勢に向かい、年末には美濃・近江を通って山城の恭仁京に至った。瀧浪貞子氏が『帝王聖武』（講談社）で述べたように、その段階で恭仁京の北、紫香樂における大仏造営がほぼ決定されていた可能性は高い。

もちろん、「紫香樂大仏」建立は実現しなかった。ここでその事情を詳説することはしないが、ともかくも、伊勢行幸は、聖武が大仏造立事業に神助を求めようとしたものであることは確実だと思う。

広嗣の反乱

重要なのは、聖武の伊勢行幸を前にした九月、九州で藤原広嗣の乱が発生し、鎮圧

軍派遣などの慌ただしい事態が発生していたことである。しかし、聖武は予定通りに伊勢行幸を決行する。その背景には、大仏建立、国分寺造営をはじめとする仏教事業の遂行こそが待ったなしの課題であるという思いがあったものと思われる。

それは広嗣の行動の本質からしても当然のことであった。つまり、しばらく前、広嗣が大宰少式に左遷され、不満を募らせたきっかけは、新羅に対する「兵を發し征伐を加えん」という侵攻計画がつぶされたことにあった。当時、新羅は韓半島で覇権を握り、唐帝国と連合して、半島の北からシベリアにかけて勢力を拡大した渤海との対立を深めていた。渤海は白村江の戦いで日本・百済と連合した高句麗の後を継ぐ国家であったから、これが日本の新羅に対する敵愾心を刺激したことは確かである。白村江の戦いで、唐・新羅の連合軍に敗北してからすでに八〇年近くがたとうとしていたとはいえ、奈良朝国家にとっては戦敗の経験は容易に忘れ難いものであった。

特に藤原氏の中樞部は新羅に対する戦争にはやった。藤原不比等の子供たちは十年ほど前に藤原武智麻呂が大宰師を兼任

し、兄弟たちが節度使となるなど、新羅に対する戦争準備の先頭に立っている。彼らが相次いで疫病で倒れたために、この動きは一頓挫したものの、不比等の孫に当たる広嗣はこの侵攻計画を突出して主張したのである。

聖武は、これを嫌った。聖武は華嚴仏教の理解が深く、絶対的な超絶と水平性、そして平和の国家思想を把握していた。しかも、聖武は、大仏建立が大事業であり、大仏建立事業に取り組みながら戦争を遂行することは、とても無理であることを熟知していた。聖武は広嗣の能力を評価していたともいわれるが、それだけに冷静に問題を見切っていたのである。

黄金の大仏と五節舞

東大寺大仏の鑄造が始まったのは、七四五年（天平十七年）。その一方で聖武は、大仏を金箔で覆うための膨大な黄金の入手に心を砕いていた。そのために東北に派遣されたのは白村江の敗戦で日本に亡命していた百済王族の正統、百済王敬福。彼が黄金を発見した背景には、百済の進んだ黄金採掘技術があったに相違ない。陸奥黄金

の発見の報が都に届いたのは七四九年二月。大伴家持が黄金の産出を祝って詠んだ歌、「すめらぎの御代さかえむと あづまなるみちのく山に こがねはなさく」は有名である。

翌々月の四月に東大寺に行幸した聖武は、この黄金発見こそ、廬舎那仏と歴代の天皇御霊たちの恵み賜うものであると誇りと喜びをあらわにした。そして、聖武は、この黄金発見を受けて、皇太子であった阿倍内親王を即位させ、孝謙女帝とし、自分は太上天皇となる。

大仏開眼会は、その三年後、七五二年（天平勝宝四年）のことであった。その晴れがましい様子は『続日本紀』に描かれて有名であるが、私が注目したいのは次の二点。

第一点は、黄金の東大寺大仏の前で貴族の諸氏が、太上天皇聖武、皇太后光明子、天皇孝謙の前で、「五節」などの舞いを奉仕したことである。五節舞とは聖武の曾祖父・天武天皇Ⅱ大海人皇子が壬申の乱に outbreak する時、吉野宮で天女を幻視したという伝説に基づいて舞われる天女の舞いである。天女の扮装をした少女が袖を翻して舞う優雅な舞踏であるといわれる。それは仏

教的な観念であるとともに、東アジアの神仙思想も反映しており、「かぐや姫Ⅱ天女」の物語にも深くつながるものである。そもそも、かぐや姫に求婚した天皇が天武天皇をモデルとしていることも想起されてよい。ここには、そのような天武天皇ゆかりの天女が大仏の前に再臨するという共同幻想がある。

特に重要なのは、開眼会の約十年前、皇太子であった阿倍内親王（Ⅱ孝謙女帝）自身が、父の聖武と大伯母の元正太上天皇をほめたたえるようにして、自身、五節舞を舞ったことがあることである。聖武は皇太子・阿倍内親王が女性として皇太子となつたことへの疑問を跳ね返すようにして、阿倍内親王こそが天武が幻視した吉野の天女の生まれ変わりであるとも言いたげに、それを群臣に目撃させた。

大仏開眼会で天女に扮して五節舞を舞い、聖武への宗教的賛仰を表現する貴族の少女たち。居並ぶ群臣たちは、彼女らを見ながら約十年前の皇太子・阿倍内親王の舞い姿を想起し、多事であった大仏造営事業の成功を祝い、天武から聖武へと続く王統への忠誠を誓ったに違いない。

新羅からの大仏巡礼団

第二点は、この開眼会に新羅から大規模な結縁があつたことである。実際、新羅は国を挙げて大仏参詣のための巡礼団を組織したと言つてよい。その規模は、新羅王子の金泰廉をトップとする総勢七百余人。

もちろん、そこには東アジアの国際政治の中で現実的な融和の外交政策を追求せざるを得ない立場にあつた新羅の政治的意図が込められていた。しかし、少なくとも巡礼団の人々にとっては、いわば華嚴という国教を同じくする国同士としての宗教的感情の交流を願う気持ちがあつたことは否定できない。日本の前近代史は、中国大陸や韓半島との間での複雑な問題を常にはらんでいたが、この参詣団の来日は数少ない心温まるエピソードの一つであると思う。

とはいっても、参詣団は厳しい状況に追い込まれた。まずはどうにか開眼会に間に合う日程で来日したものの、難波で待機することになり、大仏参詣が実現したのは開眼会の二カ月も後となった。また朝廷に参上した使節団は辞を低くして朝貢関係を願つたものの、孝謙天皇の詔は、神功皇后

伝説を持ち出し、今後は新羅国王自身がやってこいという異様に高姿勢なものとなった。

このような日本側の対応には、陸奥黄金の発見と大仏建立の大事業の実現の中でのナシヨナリズムの高揚という側面があった。聖武自身が述べているように、「これまで大倭の国には黄金は存在しない」、黄金はもっぱら韓半島に依存するほかないものと思われていた。そして、そもそも後発の日本にとって韓半島は文明の国であるのみでなく、「黄金の国」だった。例えば、今でも、韓国を訪問して武寧王陵その他の黄金の出土品を見た人々は、その見事に圧倒される。当時の日本列島の人々が、韓半島の国を「黄金の国」と呼んで尊んだのは、ある意味で当然のことであった。黄金の大仏の完成は、そのようなコンプレックスを完全に解消したのである。

その上、日本には白村江の戦いで敗北によって韓半島から亡命してきた多くの百済の王族・貴族がいた。彼らにとって、本当に友好を願うならば新羅王自身はやってこいという要求は歴史的に正統なものだったろう。そもそも前述のように、東大寺大仏の黄金は、進んだ百済の黄金採掘

の知識と技術によって実現したものであった。百済の王族たちに親しい気持ちを持つ日本の王族・貴族が新羅の人々とすぐに心から融和するのは、やはりなかなか困難であつたろう。私たちは、奈良時代の前半が、いわば長い戦後であつたということを忘れてがちであるが、白村江の戦いの影響は、それだけ大きかったものと言わなければならぬ。

称徳天皇

しかし、後の経過を見ると、孝謙女帝の新羅に対する姿勢も、基本的に平和的なものであつた。つまり、七五六年（天平勝宝八年）聖武太上天皇が死去し、翌々年、孝謙女帝も譲位して淳仁天皇が即位すると、新羅に対する戦争計画が、再び動き出したのである。淳仁の最大の補佐役・藤原仲麻呂が積極的に戦争計画を推進した。彼は実際に、西国諸国に対して新羅追討のために五百艘の兵船の建造を命ずるなどの処置をとっている。

しかし、こういう動きの中で、女帝は、結局、淳仁と仲麻呂を退ける道を選択したのである。彼女にとって東大寺の位置を持つ

ていたのは西大寺であつた。西大寺の建立の事業と聖武から教えられた仏教思想も、対新羅戦争と両立しなかつたのである。女帝にとって仲麻呂の動きが広嗣の誤りを繰り返すもの、聖武の究極的な遺志を無視するものと映つたことは想像に難くない。

すでに紙幅がなく、これらの事情を詳しく解説することはできないが、同時代の中国の女帝・則天武后の時代は、平和と経済発展の時代であつたといわれる。称徳の治世はそれと同じような性格を持ち、東アジア全体の状況の中では十分にありうるものであつたことだけは記しておきたいと思う。

おわりに

森本公誠東大寺前別当は、御著書『世界に開け華嚴の花』（春秋社、二〇〇六年）の中で、聖武天皇の大仏発願の背景に、天皇の「日本の尊嚴的立場を保持しつつ新羅との緊張した外交関係を平和的に解決する」という深い意図があつたとされている。その御指摘は、日本史研究者から見ても深く納得できるものである。

（ほたて みちひさ）

正倉院宝物と大仏

——聖武天皇・光明皇后の愛と悲しみ

奈良国立博物館 学芸部長

西山 厚

七五六年（天平勝宝八歳）五月二日、聖武天皇は五十六歳で亡くなった。『続日本紀』には、その葬儀は仏に奉るがごとくに行われたとある。

四十九日に当たる六月二十一日、光明皇后は聖武天皇が大切にしていた品々と六十種の薬を東大寺の大仏に献納した。これが正倉院宝物の始まりとなる。

皇后は献納の際に宝物目録を作成した。『国家珍宝帳』と『種々葉帳』である。

『国家珍宝帳』の冒頭には光明皇后自身が作成した哀悼の意に満ちた文章があり、続いて六百数十点の宝物の名称が列記されている。宝物目録を作成する時、宝物の順番は大切だと思ふ。真っ先にあるのは「御袈裟九領」。「御」が付くのは聖武天皇ご自身の袈裟だから。袈裟は師僧が悟した弟子に授けることがあり、仏法を象徴する品でもあ

る。聖武天皇は出家しており、大仏に捧げる最初の品が袈裟だったのは納得できる。

最後の宝物は「御床二張」、ベッドである。聖武天皇と光明皇后が使用した二つのシングルベッドを記して宝物リストは終わる。御床は最も私的な思い出の品であろう。袈裟から始まり、ベッドで終わる。よくできた順番だと思ふ。

意外なのは武器・武具が多いこと。「御大刀」百口、「御弓」百張、「御箭」百具、「御甲」百領など、宝物のおよそ三分の二が実は武器・武具である。「御」が付くのも天皇ご自身のもので、古代の天皇の武人としての姿をよく示している。

ところで、光明皇后が宝物を大仏に献納した理由は何だろうか。皇后自身は「触目崩摧」と記している。聖武天皇が大切にされた品々は、皇后にとっても思い出の品であ

る。それが目に触れると、聖武天皇が元気だった昔が思い出されて悲しくてならず、心が崩れ、摧けてしまう。愛が深いほど悲しみも深くなる。それなら思い切つてすべてを大仏に献納し、併せて聖武天皇の冥福をお祈りしたい。光明皇后が宝物を献納したのはそのためだった。

宝物の中にひじ掛けがある。よく見ると片方へゆがんでいる。聖武天皇がもたれた跡だろう。それが目に触れた時、言葉にならない痛みのような悲しみが光明皇后の胸の奥に走つたに違いない。正倉院宝物が一人の女性の耐え難い悲しみから生まれたことを記憶しておきたい。

その日、光明皇后は六十種の薬も大仏に献納した。若いころから病気がちだった聖武天皇のために集められた薬。『種々葉帳』には病に苦しむ人に用いてほしいとあり、

これを服せば「万病悉除」「千苦皆救」「無夭折」と記されている。

夭折することなし、幼いうちに死なないという言葉は胸に痛い。光明皇后の子供は夭折したからだ。薬を献納する際、光明皇后は聖武天皇ばかりではなく、満一歳の誕生日を迎える前に夭折した皇子、聖武天皇との間に生まれた薄倖のわが子のこととも思いついていたに違いない。

正倉院にはこのほかにもさまざまな献納品や東大寺の宝物など、天平文化の精髓が数多く伝えられている。もの・材料・意匠などを考えると、いずれもが世界の各地とつながっていく国際性豊かな宝物群であり、しかも伝世品であることが貴重である。

天平時代は天変地異や災厄が相次いだ。多くの人々が苦しみ、それゆえに聖武天皇も深く苦しんだ。愛する者を失う悲しみに心が崩れ、摧けた時代でもあった。にもかかわらず、あるいはそれゆえに、天平時代が生み出した仏像や工芸品は、わが国の長い歴史の中で燦然と光り輝き、今も私たちの心を打つ。

*

一八七四年（明治七年）、奈良博覧会社

が設立された。その翌年、奈良博覧会社の主催により、東大寺を会場にして第一回奈良博覧会が開かれた。そこには東大寺・興福寺・法隆寺・春日大社をはじめとする奈良の寺社の宝物と並び、千七百二十五点もの正倉院宝物が陳列された。入場者は十七万人を超え、大成功を収めた奈良博覧会は、一八七七年（明治十年）を除いて一八九〇年（明治二十三年）まで毎年開催されたが、正倉院宝物が陳列されたのは一八七五・七六・七八・八〇年の四回だけだった。

正倉院は一八七五年（明治八年）に内務省の所管となり、東大寺の手を離れた。一八八四年（明治十七年）には宮内省の所管になり、宝物は「御物」となった。

一八八九年（明治二十二年）に一定資格者だけが倉の中に入って参観することを許されたが、「天皇の宝物」として一般には公開されなくなっていく。

*

一九四六年（昭和二十一年）十月十九日、奈良帝室博物館で「正倉院特別展観（結果的に第一回正倉院展となる）」が始まった。

この年の二月ころに「御物」を一般に開

放すべきだという意見が台頭し、奈良県観光協会から宮内省へ陳情書が提出された。観光協会は帝室博物館総長にも陳情書を渡し、「個人としては賛成だ」との回答を得る。帝室博物館総長から宮内大臣へ宛てた上申書には「奈良県観光協会ヨリノ願書モ有之候通、国民齊シク希念スル処ニ有之候間、「御物」を奈良帝室博物館で陳列すれば、「再建日本文化ノ高揚啓発ニ資スル処甚大」とある。勅裁を経て、特別展観の開催が発表されたのは九月であった。

この特別展観で陳列された三十三件は、戦争中、奈良帝室博物館の収蔵庫に避難していたものであった。一九四三年（昭和十八年）、「時局ノ緊迫ニ鑑ミ」、宝物を分散することになり、奈良帝室博物館の収蔵庫に、計二百六十七件の宝物が移された。出陳品はこの中から選ばれたもので、展示は本館の回廊に限定し、反時計回りで部屋の片側のケースしか使わず、人の流れが交錯しないよう工夫している。

入館者は、十月十九日（特別招待日）が三、一七五人、二十日（進駐軍招待日）が四五〇人、二十一日（初日）が三、三三〇人、それからは増えに増えて、十一月九日（最

終日)は一〇、〇七四人、二十二日間で合わせて一四七、四八七人に達した。

当時とすれば途方もない数字である。建物の外は長蛇の列、展示室の中は立錐の余地もない混雑となったが、博物館は入場券を二十万枚用意していたので、予想人数をかなり下回ったとも言える。

なぜ博物館は二十万枚も刷ったのか。それは一九四〇年(昭和十五年)に紀元二千六百年記念として帝室博物館(現在の東京国立博物館)で開催された「正倉院御物特別展観」を参考にしたためだった。この展覧会には二十日間で四一七、三六一人、一日平均二万人という多数の人々が詰めかけた。最終日には正門の鉄扉のかんぬきが壊され、群衆が雪崩を打って展示館へ殺到したという前代未聞の大入りだった。

第一回正倉院展の最中、十一月三日に日本国憲法が公布された(施行は翌年の五月三日)。この新憲法によって、帝室の財産である「正倉院『御物』」も国有財産になることが決まった。帝室博物館も国立博物館になる。激動の一九四六年秋であった。

*

一九九八年(平成十年)、東大寺・興福

寺・元興寺・薬師寺・唐招提寺・春日大社などが「古都奈良の文化財」として世界遺産に登録された。これらの寺社はいずれも千二百年以上の長い時を超え、奈良に住む人々にとつて大切な存在であり続けている。正倉院を含む八世紀の木造建築が、今も活用されているのは世界でも奈良だけだろう。

早魃飢饉・大地震・疫病など、相次ぐ災厄に苦しむ人々の姿に深く心を痛め、わが子を喪った深い悲しみを抱きつつ、ついに大仏造立を決意した聖武天皇は、その理由を、すべての動物・植物が共に栄える世の中を造るためだと明言し、一本の草・一握りの土を手にしてやって来た人々にも協力を仰ぐよう命じた。

富や権力で造るのではなく、小さな思いを無数に集めていく手法が採用された点に大仏の真の価値がある。聖武天皇の遺愛の品々はこの大仏に献納された。献納先は大仏でなければならなかった。

平氏に焼かれた大仏の復興に携わった鎌倉時代の重源も、仲間と手分けして全国を回り、無数の小さな思いを大仏に結集させた。戦国時代に焼かれた大仏の復興に携わった江戸時代の公慶も、寄付は一本の草や針

でもいいと言つて全国を歩いており、ここにも聖武天皇の思いが継承されていることが分かる。

ところで、大仏殿は屋根瓦だけでも三トン重さがあり、その大仏殿の大屋根を巨大な二本の梁(大虹梁)が支える構造になっている。二十年にわたる公慶の復興事業における最後の難関は、大虹梁の用材を調達することだった。

全国を探し、ようやく霧島(宮崎県)で発見したが、奈良までの輸送には延べ十数万人の同心合力が必要だった。そして大虹梁を所定の場所へ引き上げた直後、公慶は大仏殿の完成を見ることなく急死した。

大仏も大仏殿も、何も知らなければ、ただ大きいだけの存在かもしれない。正倉院宝物も、美しいだけの存在かもしれない。しかし、その背後の物語を知ると、違って見えてくる。はるか昔にこの世を去った人々が親しく懐かしく思えてくる。

来年は、平城京に遷都されて千三百年の記念の年である。千三百年間に奈良を支えてくれた人々を歴史の中に見いだし、感謝する一年でありたい。

(にしやま あつし)

「平城遷都1300年祭」の開催に向けて ——はじまりの奈良、めぐる感動

平城遷都1300年記念事業協会
チーフプロデューサー

福井 昌平

一年を通じた記念事業の展開

女帝・元明天皇が遷都の詔を発せられて西暦七一〇年（和銅三年）、平城京（ならの都）の時代が本格的にスタートした。いよいよ来年二〇一〇年は平城遷都千三百年の記念すべき年を迎える。私たちは、二〇一〇年の一年間を記念年と位置づけ、「平城遷都1300年祭」のイヤー・ラウンド・オペレーションを計画している。まず一年間の事業の流れを紹介しておく。

スタートとなるオープニングイベントは今年の大みそかから新年にかけて開始される。奈良県全体を四神相応の地に見立て、北の玄武（奈良公園）、東の青龍（宇陀室生寺）、南の朱雀（吉野金峯山寺）、西の白虎（信貴山朝護孫子寺）の四会場で同時開催される。特に朝護孫子寺は虎に縁のあ

るお寺で、「平城遷都1300年祭」のスタートと虎年のスタートが重なるユニークな会場となる。

またこのオープニングイベントは、「花と自然を巡る」「古道を巡る」「歴史・文化を巡る」「社寺・国宝を巡る」「賑い・伝統行催事を巡る」といった多彩なテーマを持つ『巡る奈良』事業の一年を通じた展開の出発式ともなっている。

次のポイントになるのが、四月二十三日（遷都の日・旧暦三月十日）に平城宮跡で開催される「第一次大極殿正殿完成記念式典」である。「第一次大極殿正殿」の一般公開が翌日の二十四日から始まるのに合わせて、平城宮跡（約百十ヘクタール）を会場とした「平城宮跡事業」がスタートする。平城宮の造営に込められた往時の世界観や国づくり、文化創造にかけた

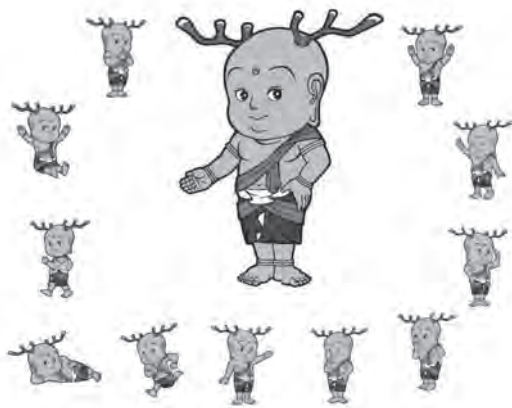


図1 シンボルキャラクターのせんとくん

人々の情熱や行動に参加体験できるユニークな「教育・観光」事業である。この「平城宮跡事業」は、十一月七日まで開催さ

れる。

さて、次のポイントは平城宮跡会場と古都奈良が一体的に推進する「平城京フェア」（十月九日～十一月七日）である。このタイミングで記念事業協会はハイライトとなる「平城遷都1300年記念祝典」を、整備が完了した第一次大極殿正殿前庭を舞台に開催する。日本の歴史・文化が連続と続いたことを「祝い、感謝する」とともに、東アジアの国々や人々との友好・交流の宣言の場とする計画である。「平城京フェア」全体としては、「奈良の都」で行われた古代行事を再現し、往時の平城京の様子を楽しく体感できるように取り組むほか、復原された第一次大極殿の前庭や東院庭園を舞台にしたユニークなコンサートや参加型イベントを準備している。

そしてフィナーレは、千三百年間続いた奈良が世界に誇る秋の伝統的な行催事へとつながっていく。国立博物館の「正倉院展」や春日大社の「春日若宮おん祭」などによりしっかりと引き継がれながら多彩な「東アジア未来会議2010」を連続的に開き、「平城遷都1300年祭」のメッセージを全国へ、そして世界へ発信しようとする計画である。

多層な「はじまりの奈良」に出会う事業へ

「平城遷都1300年祭」の統一テーマは「はじまりの奈良、めぐる感動」である。まず「はじまりの奈良」についてお話ししたい。日本の古代の国づくりや日本文化の基層を形成する上で奈良が果たした役割は大きい。平城京といえば「律令国家」の形成というキーワードにまず結びつくが、それを実現させた古代の人々の内部に蓄積されていた多様な「はじまりの奈良」を考えなくてはならない。多くの識者が指摘されているように、「山地霊場」「古墳文明」「仏教伝来」「神仏習合」「天皇制」「都城文明」「記紀歌謡」などなど、広域の奈良県を舞台に多くの「はじまりの物語が存在している。お酒や、お茶、花、芸能など、より具体的な「モノ」や「コト」についても、それぞれのはじまりの物語に興味は尽きない。「はじまりの奈良」とは、平城京を実現させた五世紀から七世紀にかけての日本人のエネルギーの総和、奈良各地で始まった多彩な「はじまり」への挑戦の集大成と考えるべきではないだろうか。平城遷都1300年記念事業を奈良県

全域やゆかりの地域と連携して推進する意義がここにある。

もう少し焦点を絞って「平城京は天武朝百年の夢（挑戦）」としたらどうだろうか。唐・新羅の連合軍が六六〇年（斉明天皇六年）に百済を滅亡させた。六六三年（天智天皇二年）には、百済復興に参戦した日本は白村江で完膚なきまでの敗北となる。東アジ



図2 「平城京フェア」の「大極殿音絵巻」

平城宮跡の価値とポテンシャル

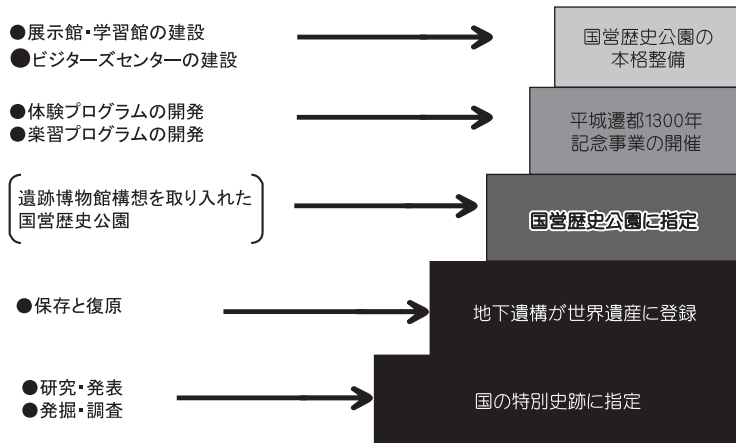


図3 平城宮跡の価値の多層化

もちろん、「平城遷都1300年祭」の主役は、「平城京」そのものである。平城京の時代に絞っても、「はじまりの奈良」の物語はさらに際立っている。「戸籍」や「貨幣」、「律令」など東アジアのグローバルスタンダードの中で日本が新たな生き方に挑戦した時代である。七二年（和銅五年）には『古事記』が撰上され『風土記』の編纂令が出されている。七十六年（靈龜二

年）には「遣唐使」が派遣され、七二〇年（養老四年）には『日本書紀』が撰上された。七四一年（天平十三年）には「国分寺・尼寺」の建立の詔が、七五二年（天平勝宝四年）には「大仏開眼」が挙行された。今日に残る「正倉院」や『万葉集』も平城京の時代の中期から後期の歴史的な文化遺産である。「平城遷都1300年祭」は、ここに示した多くの「はじまりの奈良」の個別本格的な「1300年記念」事業に続く、単なる序章にすぎないとの声もある。

**「学び」と「観光」が融合した
新しい価値の体験**

「平城遷都1300年祭」は、第一次大極殿正殿が復原・公開される「平城宮跡」を中心会場に展開される。平城宮跡は、「はじまりの奈良、めぐる感動」の主舞台となる。「平城宮跡」は今から百年前、先駆的な市民の「保護・保存運動」に端を発し、戦後ようやく国の特別史跡に指定された。五十年有余にわたる奈良文化財研究所の発掘と研究の成果の偉大さは周知の通りである。一九九七年（平成九年）には地下遺構が世界遺産「古都奈良の文化財」の一つとして登録された。

アに出現した巨大な唐帝国の存在の中で、日本はどう生きていくのか。そうした苦闘の果てに天武朝が出現して、日本史上初の国際都城「平城京」が誕生した。こうした歴史的文脈の中に平城京を置いてみると、壬申の乱を経て天武朝が成立し、「飛鳥」「藤

原京」「平城京」へと続く日本の律令国家形成のドラマが、東アジアのスケールをもって私たちに迫ってくる。「飛鳥」「藤原」「平城」の三都の物語は、「平城遷都1300年祭」の大きな魅力を構成してくれるはずである。東アジアとの玄関口「難波」も加えるべきとの声に応え、三都や四都を結ぶユニークな歴史文化ウォークも計画されている。それと同時に、三都をネットワークさせた「国家歴史公園」構想や「世界遺産」ムーブメントへの新たな取り組みの起点となる事業にしたいとの思いが現地では強くなっている。

「平城遷都1300年祭」は、第一次大極殿正殿が復原・公開される「平城宮跡」を中心会場に展開される。平城宮跡は、「はじまりの奈良、めぐる感動」の主舞台となる。「平城宮跡」は今から百年前、先駆的な市民の「保護・保存運動」に端を発し、戦後ようやく国の特別史跡に指定された。五十年有余にわたる奈良文化財研究所の発掘と研究の成果の偉大さは周知の通りである。一九九七年（平成九年）には地下遺構が世界遺産「古都奈良の文化財」の一つとして登録された。

文化庁は早くから「平城宮跡・遺跡博物館構想」を有し、発掘遺構の保存や朱雀門、東院庭園、第一次大極殿の復原プロジェクトを推進してきた。「平城遷都1300年祭」の開催を契機として、「国営飛鳥歴史公園」と連携して「平城宮跡」を国営公園とすることが閣議決定され、二〇一一年以降には本格的な整備が計画されている。

複雑で膨大な調整作業の苦労は傍らに置くとして、私たちは、この百十ヘクタールの平城宮跡全体を活用した、フィールドミュージアム型の「平城宮跡事業」を構築中である。半世紀にわたる「発掘と研究」「保存と復原」の成果を踏まえ、国土交通省や文化庁、奈良文化財研究所との協働で、平城京の建設と国づくりにかけた人々の情熱と知恵に触れ合えるへ場づくり挑戦している。往時の「天平文化」に参加体験でき、「天平人」になり切れる多くの「なりきり体験」プログラムへの期待は大きい。「学び」と「観光」が融合した新しい「参加体験学習」プログラムの展開である。

その魅力の一端を紹介しよう。まず、既存の「平城宮跡資料館」や「遺構展示館」がリニューアルオープンする。五十年有余

の「発掘と研究」の成果が、解説ボランティアの支援によって分かりやすく案内される。復原された「朱雀門」と「東院庭園」では、解説ボランティアのほかに、歴史的行事の再現に積極的に挑戦する。朱雀門の衛士の交代劇などは話題を呼ぶはずである。

しかし、何といっても最大の話題は、復原された「第一次大極殿正殿」への訪問である。「大極殿正殿」は政治・儀式の中心で、天皇の玉座「高御座たかみくらの実物大模型」を見学できるほか、前庭では天平衣装を着て「なりきりウォーク」を体験したり記念撮影をすることができ。また、この前庭は、秋の「平城京フェア」では、魅力満載の特別なイベント会場になり、多くの音楽イベントの舞台にもなる計画である。

平城宮跡のフィールドミュージアムとしての魅力を高めるために、新たに二つの展示・体験館とユニークな「平城宮跡探訪ツアー」を準備している。新設展示・体験館は、遣唐使船の復原展示を持った「平城京歴史館」と平城京時代の「仕事」と「生活」に参加できる「平城京なりきり体験館」である。インスタクターとの協働で発掘体験にも挑戦できるといふプログラムも準備

されている。

次のステップに引き継がれるプログラムとして最も力を入れているのが、「平城宮跡探訪ツアー」である。インタープリテーション型のボランティアガイドツアー事業で、従来の修学旅行や校外学習、カルチャーセンターの魅力を超えた本物の歴史サイトをフィールドミュージアムとして探訪する刺激的なツアーである。ボランティアガイドの公募では、全国から応募があり、現在はおもてなし研修と同時に魅力的なガイドソフづくりや運営システムづくりに一生懸命汗を流していただいている。最先端のデジタル技術は裏方に回り、参加者との「対話」と「交流」を通じた、新しい体験学習「価値」を提供する。まさに、平城宮跡を「はじまりの奈良、めぐる感動」の主舞台にしようとの新たな挑戦である。

「巡る奈良」で「めぐる感動」

平城京は一日にして成らず。奈良全域が有する多様な「はじまりの奈良」が濃縮されて初めて、平城京がつくり上げられた。こうした発想に基づいて、「巡る奈良」事業」を県全域で準備している。別の表現をすれ

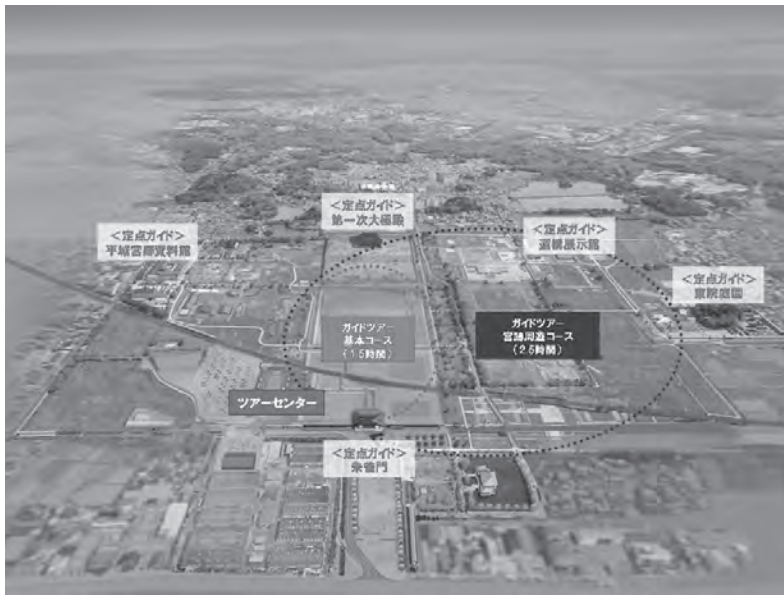


図4 体験学習の平城京歴史探訪ツアー

ば、それぞれの地域の「はじまりの奈良」の再発見・再構築によって、奈良の新たな「文化観光交流」パワーを創出しようとの試行である。素材は、余りあるほど存在している。奈良大和路には、悠久の歴史時間をくぐり抜けてきた素晴らしい文化財と自然がある。

まず、奈良全域を「四神を巡る——奈良歴史探訪回廊」として位置づけた。「平城京周辺」は古都・奈良のにぎわいを、「大和高原・宇陀周辺」は古い町屋と素晴らしい里山を、「飛鳥・藤原周辺」は香り高き万葉の古里を、「吉野周辺」は静謐な自然と神秘性を、「葛城周辺」は古代王朝のロマンを、「斑鳩・信貴山周辺」は日本人の心のよりどころ「和の精神」をそれぞれテーマにして、平城宮跡から各地へ、各地から各地へ、そしてそれぞれのエリアの中をもっと深く「巡る」仕組みづくりに取り組んでいる。そのために、奈良観光史上初の各地から各地へ便利に移動するための「アクセス早見表」の作成にチャレンジした。なかなかの評判である。

さらに、本記念事業では、和辻哲郎著『古寺巡礼』に触発され、テーマを持った「巡る」事業の新構築に取り組んでいる。代表する事業を二つ紹介しよう。その一つは、「奈良大和路 秘宝・秘仏特別開帳——祈りの回廊」事業である。二〇一〇年一〜三月の「冬季シリーズ」と四〜七月の「春季シリーズ」、十〜十二月の「秋季シリーズ」に分けて、社寺による秘宝・秘仏の特別公開や特別講話などが積極的に開催される。

もう一つは、日本で最大規模を誇る奈良の国宝巡りをテーマにした「国宝巡礼奈良まほろば手帳」の発行である。ポケットタイプの「国宝周遊ガイド・ブック」を手に携えて、「聖徳太子」や「聖武天皇」「光明皇后」「行基」などに出会えるストーリー性のある国宝巡りを提案するものである。「はじまりの奈良、めぐる感動」への参加と体験。今、私たちは、第一次大極殿正殿が復原・公開される平城宮跡を主会場とし、「日本のはじまり奈良」を合言葉に県内各地をネットワークさせ、千三百年の時空を超えた感動の△場▽と△機会▽を、心を込めて準備中である。皆さまには、それぞれ自分の新しい奈良の旅の「はじまり」を、ぜひ計画していただきたいと思う。(情報へのアクセスは、<http://www.1300.jp/>)

(ふくさ しょうへい)

「なら国際映画祭」を通じて 奈良の魅力の世界に発信

映画作家／なら国際映画祭
エグゼクティブディレクター

河瀬 直美

かねてからの夢は、故郷奈良に世界の人々が集い交流する、国際映画祭の実現でした。生まれ育った奈良で創り続けた映画作品は、奈良とそこに生きる人々の存在を世界にアピールしてきました。足元を見つめ、故郷

を見つめ、一步一步を歩んできたことが、カンヌ国際映画祭グランプリ受賞につながったと思っています。世界から注目されているこの機会を逃さず、多くの世界遺産を有する奈良で国際映画祭を開催したいと考えました。

世界中の多くの人々が奈良で出会い、奈良の素晴らしさを肌で感じてほしい……。そして、映画祭での体験・出会いが、特に若い世代に未来への希望やチャンスをもたらすことを願っています。そんな若者へのメッセージとして思うのは、「この世界は、この奈良は素晴らしい」ということ。「今」

と「今」を積み重ねて「未来」へ……。そんな想いを胸に、千年続いた古都奈良の素晴らしい歴史や文化の先に、「なら国際映画祭」という新しい文化イベントを創出します。

「かそけき「祈り」はえも知れぬ涙を誘う。古代から受け継がれてきた生命の源に想いを馳せれば……そうだ、わたしだけが孤独の淵を彷徨う魂をもてあそんでいるのではなく、むしろ「わたし」という一点を含む万物が共鳴しあって豊かに存在しているのだということに感動する。平城宮跡の大地に両の足をしっかりとつけながら西の彼方に沈む太陽を見つめてみる。すると、そこそこにある木々もまたこの大地に根を張って立っている姿をいとおしく想い、その大地によってつな

がってきた千年の時と今が未来へ続いていく喜びに満たされる。こんな気持ちになれるのは、まぎれもなく先祖からの恩恵によるものであり、それゆえにわたしは祖国日本を愛してやまない」

これは、今年の初めに開催したプライベートに寄せた文章ですが、こうした想いは「祈り」という言葉に変わり時代に遺されていくのだと思っています。そんな気持ち



2007年カンヌ国際映画祭で
『殞の森』がグランプリを受賞



2009年3月に、なら国際映画祭第3回プレイベント
「『祈りの時代』を考える」を開催

になれるのが、祈りの場である神社やお寺の空間が生活空間と調和する、奈良という土地の特徴だと思えます。これは、世界に誇ることのできる財産だと言えるのではないのでしょうか。その証拠に、外国から日本を訪れる方の中には、奈良の奥深さを知り、何度この地にやってくるリピーターが少なくありません。単なる観光地を回るだけの旅ではなく、この土地特有の精神世界に触れることで、自身のアイデンティティを刺激されるのだと思えます。

駅から歩いて行ける場所に原生林や、世界遺産に登録されている建造物がこんなに存在する地域がほかにあるでしょうか。奈良は空が大きく、大地が広く、その下に眠るものは果てしない……。長い年月変わらずにそこにある山々や木々からは、ちっぽけな自分がその大いなるものに守られているのだという事に気づかされ、ここは人に宝が宿る場所なのだと改めて感じるのです。それらの魅力を国内外の人々に伝えることのできる絶好のチャンスが、来年——、平城遷都千三百年の記念すべき年。

この歴史的な年……二〇一〇年の夏に、第一回なら国際映画祭を開催します。開催期間は、八月二十五日(水)～二十九日(日)の五日間を予定しています。

奈良ならではの場所……例えば神社や仏閣での野外上映や、町家の活用などを企画中です。奈良に泊まり、食事をし、音を聞く……、そんな風に生活を体験してもらうことが、奈良の良さを知ってもらう一番の方法なのではないでしょうか。境内やまちの中で、虫の音を聞きながら、夜風をほおに感じながら映画を観るとするのは、と



光明宗総国分尼寺 法華寺で野外上映会を開催
(2009年9月27日プレイベント)



春日山原始林
滝坂の道 (写真・奈良市観光協会)

でも豊かなことだと思えます。奈良のまち全体が映画館となり、この豊かな地域性を感じながら映画を鑑賞し、生きることの素晴らしさを語り合う……。こんな体験は世界のどこへ行ってもできないよね、とってもらえるような映画祭にしたいと思っています。また、地域の人々にとっても、この場所を出て行かなければ世界の人と会えないのではなくて、このまちに世界の人が集い、ひざを突き合わせて暮らしを語る機会があれば、それは真の交流の場となることでしょう。自分の暮らすまちに誇りを持ち、「このまちが好き」と堂々とと言えるのは、本当に幸せなことだと思います。それこそが、次の世代へ渡していきたい気持ちです。

また、若者が未来へ希望を持つ地域は、活力があるに違いないという想いから、若手の発掘・育成にも力を入れています。国内外、特に東アジアのこれから〆の監督が奈良に来て、奈良の人々の手を借りて、奈良を舞台に映画を撮る……。それを、第一回なら国際映画祭でワールドプレミア(世界で最初に奈良で)上映したいと考えてい

ます。そしてその作品が世界を歩いていくことで、新しい目を通して描かれた奈良の風景や生活といった魅力が、世界に発信されていくことになるでしょう。

この映画祭の実現は、わが子へ遺したい故郷奈良の真の発展だと確信しています。そのためには何よりも、私たちの想いに賛同していただける方たちのご協力・ご支援が不可欠です。

現在、サポーターとなつてこの映画祭の活動を支えてくださる方を、大募集しています。サポーターの皆さまには、プレイベントや本開催のご案内を優先的に行なったり、また、サポーター限定のイベントなども企画中です。一緒に世界の人々をお迎えし、大いなるものに育まれたここ奈良の地で、「本物と本物の対話」を分かち合いましょう。

(なら国際映画祭サポータークラブの詳細は、映画祭公式サイトをご覧ください。
<http://www.nara-iff.jp/ja/supporter/>)

サポータークラブの詳細や私たちの想いをまとめたパンフレットも作りました。な



サポーター募集中!

ら国際映画祭のイメージカラーはグリーンです。奈良は、奥山原生林をはじめどこを見回しても緑があり、私たちはこれらの自然とともに生きています。それらのものと共存することは、命の源を考えるきっかけになり、そのことは、人間だけが偉いとおごるのではなく、むしろそれら自然のものへの畏怖の念を持ち、敬虔な気持ちで接す

る心を養うのだと思っています。なら国際映画祭は、そういった人間が古代から培ってきた豊かな感性を育む文化祭典でもあります。

私は、この映画祭を継続していくことが何よりも大切だと思っています。記念事業たるものは往々にして、その開催年だけが大きく取り上げられ、次年度にはまったく姿を消すお祭りとなりがちですが、奈良は千年続く伝統行事を続けてきた場です。

第一回が数を重ねて百回になり千回になる――。わたしは、千年先の人がこの奈良の土地に生まれ、この地で生活していることを誇りに思う、そんな祭典の始まりをここに提唱します。

なら国際映画祭は、映画だけの祭典ではなく、後には「奈良祭」と題されるように、さまざまな表現――音楽、ファッション、写真、絵画、演劇、パフォーマンス、伝統文化、産業、祭り、食、クラフト等――の発表の場になればいいと考えています。そして、生きていることに感謝し、豊かな気持ちで明日を迎える――。そんな「奈良祭」が、千年続いていきますように……。

(かわせ なおみ)



なら国際映画祭 開催概要

名称：第1回なら国際映画祭
(Nara International Film Festival 2010)
会期：2010年8月25日(水)～29日(日)の5日間(予定)
会場：奈良市内各所
主催：特定非営利活動法人
なら国際映画祭実行委員会

なら国際映画祭の ロゴストーリー

「なら国際映画祭」のロゴは、“天平の^{いらか}薨

いにしへの 奈良の都の八重桜
けふここのへに 匂ひぬるかな

これは「小倉百人一首」第61番に載せられた伊勢大輔^{いせのたいふ}の有名な歌ですが、そのおかげで八重桜は古都奈良の象徴的な花にもなっています。

平城遷都1300年記念の年(2010年)に開催される「なら国際映画祭」にふさわしいロゴとしてこのモチーフが採用されました。外輪にあしらわれた24の点は、映像の基本となるフィルムの24コマ/秒を意味します。そして、桜の5枚の花弁は五大洲を意味し、中心部の7つの点(雄しべ)は世界をひとつにする7つの海を表現しています。

【お問い合わせ・パンフレットご希望の方はこちらまで】
特定非営利活動法人 なら国際映画祭実行委員会 事務局
〒630-8241 奈良市高天町45 アート福住ビル5F
TEL 0742-95-5780
FAX 0742-26-3507
info@nara-iff.jp
http://www.nara-iff.jp

MICE推進アクションプラン

都市・観光地とMICEのかかわり方

財団法人日本交通公社 主任研究員

朝倉 はるみ

インバウンド誘致に貢献する 国際的なイベントや大会

二〇一六年夏季オリンピックは、東京都も候補地の一つとして誘致活動を続けていましたが、十月二日の国際オリンピック委員会（IOC）総会でブラジルのリオデジャネイロでの開催が決定しました。

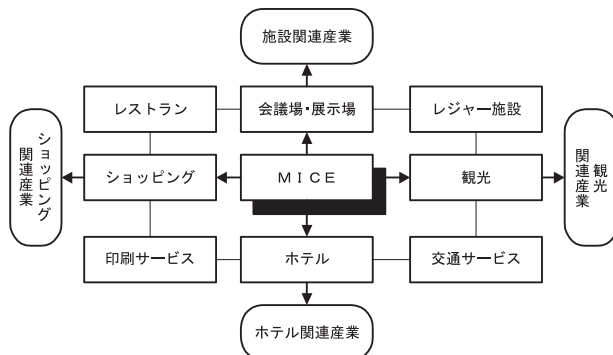
オリンピックやサッカー・ワールドカップをはじめとした国際的なイベントや会議・大会には、世界各国から参加者・関係者が集まることから、観光立国実現、特にインバウンドの増加に向けて二〇〇七年六月に閣議決定された「観光立国推進基本計画」においても、「国際会議件数を平成二十三年までに五割以上増やすことを目標とし、アジアにおける最大の開催国を目指す」ところが五つの基本目標の一つに掲げられました。しかしながら、二〇〇八年後半からの世界的

不況やインフルエンザの流行で、この基本目標の達成が危ぶまれています。そこで、観光庁では、訪日外客誘致や経済効果の拡大等に向けて、国際会議だけでなく、スポーツや文化のイベント、見本市等を含めた「MICE（マイス）」全般の誘致へと方針を転換しました。

MICE（マイス）とは？

ところで、MICEという言葉は一般に浸透しているとは言い難いですが、企業等の会議（Meeting）、企業の行う報奨・研修旅行（Incentive＜Travel＞）、大型国際会議（Convention）、イベント・展示会・見本市（Event/Exhibition）の、英語の頭文字を組み合わせた言葉で、「明確な目的を持った、関心を同じくする人々が集まり、交流すること」と定義できます。MICE開催により、交流を通じた開催地の活性化や認知度の向上、人的ネットワーク

図 MICEの経済波及効果の概念図



(財)沖縄地域科学研究所資料より(財)日本交通公社作成

の獲得、大きな経済効果の創出等が期待できます。特に、一般的な観光客と比べると、MICE来訪者は滞在日数が高い、消費金額が多いと

表 一般観光客とMICE参加者の平均消費額（鳥取県の例）

（単位：円）

	宿泊客		日帰り客	
	一般観光客	MICE参加者	一般観光客	MICE参加者
宿泊費	12,141	17,025	—	—
交通費	5,045	4,593	3,161	3,714
飲食費	3,827	11,160	2,536	3,444
土産物代等	3,542	8,772	2,417	4,917
観光・娯楽その他	—	13,960	—	4,167
合計	24,555	55,510	8,114	16,242

〔平成17年度コンベンション経済的波及効果推計調査報告書
（(財)とっとりコンベンションビューロー、2006年5月）〕

〔観光客入込動態調査結果（鳥取県、2006年9月）より(財)日本交通公社作成

といった点で経済効果が大きいのが特徴です。また、国際会議や展示会等で開催周期が固定している場合は需要の先読みが可能になる（将来需要を確保できる）ことや、観光需要に比べ外部

環境の影響を受けにくい（例：学会は定期的に開催される）といった、開催地にとってのメリットがあります。

ミーティング（M）や、インセンティブ（旅行）（I）は民間企業が実施することが多く、市場規模の把握ができないため、MICE全体の市場規模を把握する公的な統計はありませんが、（社）日本イベント産業振興会の「平成十九年国内イベント市場規模推計結果報告書」によると、二〇〇七年のイベント市場は全体では二兆七千二百六十八億円でした。

観光庁によるアクションプランの策定

観光庁は「国際交流拡大のためのMICE推進方策検討会」を設置、そこでの議論を経てMICE誘致・開催への環境整備・支援などを柱とする「国際交流拡大に資するMICE推進アクションプラン」（以下、アクションプラン）を二〇〇九年七月末に策定し、「MICE全般プロモーション」「誘致・開催に関する環境整備・支援」「MICEの基礎的基盤の強化、環境整備」を提案しました。九月からは、国内十カ所程度で行政や民間を対象にアクションプランの説明会を開催し、またMICE誘致の重要性を関係者に認知してもらうため、MICE開催による経済

効果を推計する手法を二〇〇九年度中に策定して二〇一〇年度から地方自治体に活用してもらうこととしています。

中長期的な課題としては、MICE参加者の入国手続きを優先するなどの法律・制度の整備、大型国際会議施設の整備などにも取り組む予定です。

日本におけるMICE誘致の現状

観光庁は、これまで国際会議誘致に力を入れており、一九九四年には「国際会議等の誘致の促進及び開催の円滑化等による国際観光の振興に関する法律（コンベンション法）」が施行されています（二〇〇八年改正）。そして、この法律に基づいて、国際会議場施設や宿泊施設、国際会議等の誘致体制が整備されていること、近傍に観光資源が存在すること、といった認定要件をクリアすると、国際会議・観光の振興に積極的に取り組んでいる都市『国際会議観光都市（コンベンションシティ）』として国土交通省（現在は観光庁長官）に認定されるのです。現在、コンベンションシティは全国に五十一都市あり、最後の認定は二〇〇七年八月のさいたま市です。

観光庁は、「コンベンション」から「MICE」

へと誘致対象を拡大し、「MICE」という言葉そのものの認知度向上も課題としています。観光庁の担当者も「国際会議担当参事官」から「MICE推進担当参事官」に職名を変更しました。

しかし、国の目標が二〇〇七年六月には「国際会議誘致」だったものが、二年後の二〇〇九年七月には「MICE誘致」へと短期間で変更されたため、都道府県や市町村の混乱・困惑も想定されます。観光庁にならって、各地の「コンベンションビューロー」が「MICEビューロー」に、担当者が「MICE担当」に名称を変えるということもあり得ますが、その前に行政や民間の関係者がやらなければならないことがあります。

MICE誘致に取り進む前に、関係者が考えるべきこと

都道府県・市町村は国の施策を現場で実現する役割を担いますが、必ずしもすべての自治体が国の施策を実施できるものではありません。

例えば、二〇〇三年から推進されている「ビジット・ジャパン・キャンペーン（VJC）」。観光立国となることは、外国人旅行者にとって魅力的な観光地が増え、多くの外国人旅行者に訪

れてもらえる国になることが目標と言えますが、外国人旅行者が興味を持たない観光地、外国人旅行者を必要としない観光地もあるのです。

MICEも同様に、開催できる都市とできない都市があります。前述したように、コンベンションシティに認定されるにはいくつかの条件を満たすことが必要です。MICE、特に国際的なMICE誘致に関心のある都市・観光地は、まずこうした「基本的な力」があるかどうかを冷静に見極めなければなりません。すでに国内のコンベンションシティは五十二都市あり、世界各国・各都市もMICE誘致に力を注いでいますから、MICE誘致はかなりの「激戦」です。「国策だから」という理由ではなく、「わが都市、わが観光地にMICE誘致は必要か、誘致できるのか」という、客観的な判断が必要です。

例えば、MICEには会場が不可欠です。会場、展示場、競技場等、あなたの都市・観光地ではどの程度の規模のMICEなら開催が可能ですでしょうか？ 国際MICEであれば、同時通訳設備や施設内の案内看板等の多言語表記も必要です。

宿泊施設は、外国人旅行者は「ホテル」を使い慣れているでしょうし、ビジネス目的のMICEであれば、「二室二人」「一室一人」での利用が

常識です。MICE施設の近くに十分な宿泊施設があるでしょうか？ また、旅館が「一室一人」利用を快く受け入れてくれるでしょうか？

MICE参加者は、MICEの前後に周辺を観光することも多く、MICE主催者が数時間から一泊程度の観光ツアー（エクスカージョン、アフターMICE等と呼びます）を実施することもあります。あなたの都市がMICE開催地ならば、近隣に魅力的な観光地・観光資源がありますか？ MICE開催地周辺の観光的魅力は、主催者がMICE開催地を決める、あるいは参加者がMICEへの参加を決める際の重要な「決定要因」になりうるのです。

MICEが無理なら「エクスカージョン」で

MICE開催地は、会場や宿泊施設の有無によつてある程度限定されますが、「エクスカージョン」であれば、MICE開催地周辺の観光地で十分受け入れられます。名所・旧跡の観光、郷土料理の飲食、物産の買い物、伝統芸能の体験等、既存の資源・施設でMICE参加者に楽しい時間を提供することができます。

MICEの開催は無理でも、MICEを開催できる都市（コンベンションシティ等）の近くにある都市や観光地は、MICEに絡めてこう

した「プラスα」の役割を担うことも可能です。つまり、広域連携と役割分担の視点で考えると、より多くの自治体がMICE誘致に取り組むことができます。

都市と観光地の役割分担の例

MICEは、観光客が伸び悩む日本各地の都市・観光地において今後拡大が期待できるマーケットでもあります。当財団でも、都道府県や市町村の観光振興計画策定等をお手伝いする際、地元MICE誘致の可能性があれば、それを計画の中に盛り込むことをご提案しています。

例えば釧路市のケースでは、二〇〇五年の市町村合併を機に策定した「釧路市観光振興ビジョン」(二〇〇六年度)にMICE誘致を提案させていただきました。釧路市は一九九三年に「第五回ラムサール締約国会議」を開催しており、会議・展示施設「観光国際交流センター」(ホール面積一、八〇〇平方メートル)と大規模ホテル二軒を有し、一九九四年には「コンベンションシティ」に認定されています。釧路市は、かねてよりこれらの施設の活用や合併後の新市の一体感醸成を模索していたこともあり、それらを踏まえてビジョンの九つの基本戦略の一つに「MI

CE産業育成戦略」を掲げたのです。

一体感の醸成は、釧路市中心部でMICEを開催し、「エクスカーション」(釧路市では「アフターMICE」と呼んでいます)として、釧路市中心部での産業観光や釧路湿原とともに阿寒湖温泉も楽しんでいただく、という戦略です。阿寒湖温泉はマリモで有名な阿寒湖畔にあり、国立公園の豊かな自然と温泉大浴場という、釧路市中心部、つまり都市にはない魅力を楽しんでいただけるのです。二〇〇八年度には、市内で開催された大規模大会の後、阿



釧路市のMICE(左)及びアフターMICE(右)誘致用パンフレット(2008年度作成)

寒湖温泉へのアフターMICE誘致に成功しています。

また、釧路市では、ビジョン策定後、市内のMICE関係者を対象にした勉強会の開催やMICE誘致パンフレットの作成、誘致戦略の策定、経済効果の測定等に官民協働で取り組んでいます。

ジャパンMICEイヤー始動に向けて

観光庁は国内外に対するMICEのPRを目的に、二〇〇九年十月から「Japan MICE Year(ジャパンMICEイヤー)」をスタートさせ、アクションプランで掲げた重点項目の実現に取り組むこととしています。

繰り返しになりますが、MICE誘致に取り組む都市は国内外に数多くあり、激戦マーケットです。二〇一六年のオリンピックを東京が誘致できなかった理由の一つに、「なぜ東京か」という、他の候補地との違いを明確にできなかった点が指摘されています。今後MICE誘致に取り組もうとする都市・観光地は、MICE開催地として、あるいはエクスカーション対象地としての強み・弱みをいま一度見直し、競合各地との比較をした上で、誘致に取り組むべきでしょう。

(あさくら はるみ)



連載 I
あの町この町
第 36 回

三叉路の知恵——長崎県佐世保市

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀
(イラスト＝著者)

風の便りに聞いていた。長崎県の佐世保市に「四ヶ町アーケード」という商店街があつて、ことのほか活気がある。それは「三ヶ町アーケード」につづいていて、両者を合わせたると全長一キロにあまる。地方都市のアーケード街の大半がシャッター街と化したなかで、佐世保のそれは珍しい例外であり、全国の同業者が視察にやってくる。

べつに同業者ではないが、見学にやってきた。JR 駅前にそびえる全国チェーンのホテルは敬遠して、アーケード街に近く、いかにも土地の人が経営しているホテルにした。いわばアーケード街と地つづきであつて、それなりに繁栄の秘訣を共有している——あとでわかったが、正しい判断をしたようだった。

戦前の佐世保は軍事都市だった。海軍佐世保鎮守府が置かれ、海軍の町、また海軍

工廠の町として発展した。

明治十七年（一八八四）横須賀鎮守府開庁
明治十九年（一八八六）佐世保鎮守府開庁
明治二十三年（一八九〇）呉鎮守府開庁
明治三十四年（一九〇一）舞鶴鎮守府設置

佐世保は明治政府が首都圏について二番目に設けた鎮守府だった。巨大な海軍軍事基地をひらくにあたり、いずれにも共通する条件があつたと思われる。

- 一、海岸部の寒村であつて立ち退きさせやすいこと。
 - 二、斜面がなだれ落ちる地形にあつて海が深いこと。
 - 三、入江の奥にあつて秘密を保ちやすいこと。
- さきだつて海軍省水路部が調査にきた。

佐世保の「保」は「浦」の意味とする説があり、それによれば佐世の浦である。小さな漁村で、背後は弓張岳、但馬岳の山並み。入江が深く、二つの半島が東シナ海への門番のように控えている。この地形を見つけたとき、水路部測量班は小躍りしたのではあるまいか。

鎮守府には庁舎、海軍施設、海兵団宿舍、海軍病院などのほかに、造船所を中心とする海軍工廠が開かれ、斜面一帯が職員、工員の住宅地にあてられた。海辺の寒村がみるまに大きく変貌して、人口がうなぎのぼり。

「四ヶ町アーケード」入口の小さな広場に「五足の靴」文学碑が建てられていた。明治四十年（一九〇七）、与謝野鉄幹・北原白秋・木下杢太郎・吉井勇・平野万里の五人が東京を発つて西下し、九州旅行をした。日本

の近代文学史に名をのこした面々だが、当時三十代半ばの鉄幹のほかは四人とも十代終わりから二十代はじめの青年たちで、「皆ふわふわして落着かぬ仲間」だったという。多少とも重味のあったのは「厚皮な、形の大きい五足の靴」のみ。そんなわけで、わが国に珍しい共同作による紀行記は『五足の靴』と名づけられた。

五人が佐世保に着いたのは夏の盛りりの八月十五日。

「佐世保は思ひの外不恰好な町である」

軍港都市であれば港を中心に整然と区分けされていると思っていたが、「一点ぼたりと落ちた墨が、次第に左右に広がって行く」ような形をしており、そこをまっすぐの大通りが一筋、「拳骨のやうに中央に横（た）はって」、そこから肋骨のやうないくつもの小路がのびている。

昼間はさびしいほど静かだった。日暮れに五人が散歩に出たところ、辺りはウソのやうに一変していた。

「海軍士官がゆく、水兵がゆく、小僧がゆく、職工がゆく、人夫がゆく、乱雑な響が四辺に満ちて、人いきれで蒸（む）されるやうに思われる」

佐世保川をはさみ、海寄りが海軍関係、山寄りが商店と住宅地区。住民の大半が昼

間は川向こうで働き、夕方に大挙して移動する。ノーツンキな歌人と詩人の卵の五人組は、そんな軍港都市の特殊な性格に圧倒されて、目を丸くしてながめていたらしいのだ。

記念碑のすぐ前から、ひろびろとしたアーケードがのびている。遠近法の原理で、先端が点になるほどに長い。半円・半透明

の天井から、やわらかい光が降り落ちてくる。足元は白と淡いアイボリー色の碁盤模様で、要所にベンチが置かれている。

「四ヶ町アーケード」の名前は本町、下京町、上京町など四つの町筋にわたるからで、本町交差点をはさみ、そのまま「三ヶ町アーケード」につづいている。よそ者には一本の長い通りなのだから「七ヶ町アーケード」とすればいいと思うのだが、地元には一つに



できない事情があるのだろう。これもあとで判ったが、たしかに二つに割っているほうがいいのである。

ふつう私は旅先で買物をしない。少しも荷物がふえるのがイヤなのだ。ところが佐世保では、ちゃんと予備をもっていたのに、文房具店でインクのスペアを買った。袋物屋で小袋を買った。帽子屋であやうく帽子を買いかけた。さらにおよそないことだが和菓子屋に入りこみ、奥で抹茶つきのお団子を食べた。なぜか？ つまり、そんなふうには誘いかけ、財布をひらかせる何かがあったからだ。

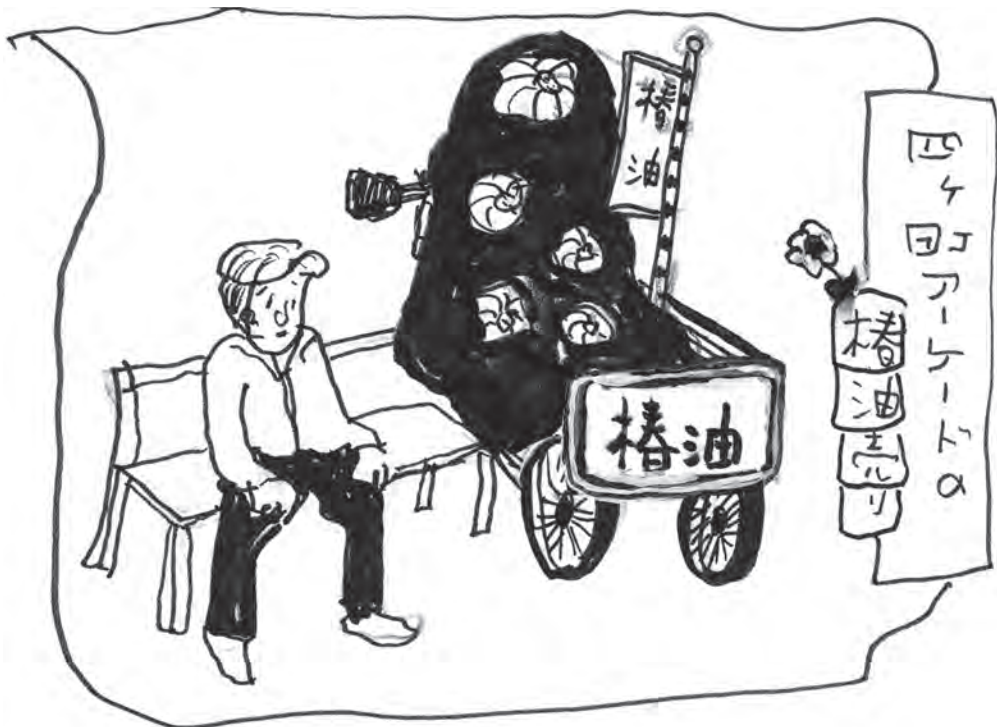
ゆったりしていて、上からの光がやわらかくて、店先、またショーウィンドウの飾りつけに工夫がこらされていて……。そういったかぎりでは、いまなお元氣な商店街とほぼ同じ。

なにげなく文房具店に入っていて気がついた。いまだき、さして買い手のありそうもない万年筆のところも品揃えが豊富で、はやり物に劣らず丁寧な商品管理がされている。お客を迎えるの応対がテキパキしていて、聞いているだけで気持がいい。そのお返しに、せめてインクのスペアでもと声をかけると、タテ長のボックスにあらゆるタイプのスペアが用意してあった。

たいていの店先に手書き用のボードが掲げてあつて、日ごとにメッセージが送られる。

「朝夕、ずいぶん涼しくなりましたね」

風邪の注意をよびかけてから、新製品の紹介に入り、パン屋は「ミニレーズンパン90↓80円」とあつて、本日のお買い得。これまで店の性格上、日曜は休んでいたが、お客様の要望にお答えして、「日曜日も全力で営業」に踏みきったところもある。シャレたモード店の隣りに地産地消の店があつて、佐世保の海と山の産物が、いかにも「とりた



て」の磯くささ、山くささそのままですんで並んでいる。

「街角ライブに歌姫・マリーンがやってくる！」

四ヶ町と三ヶ町の境目は島瀬公園しまのせとよばれる広場であって、これを中心に周辺の通りがライブ会場になる。丸天井のあちこちから大スクリーン状の告知板があつて、オペラ公演、市の文化施設のイベントのお知らせ。よその催しでも熱っぽい情報にするところがエライのだ。銀行前のスペースで、三輪自転車の荷台に「椿油」の看板をつけたおじさんが、のんびりと店を出していた。佐世保湾の向こうの五島列島特産品であつて、列島北端の宇久町は海をへだたてて佐世保市と合併したばかり。

佐世保のアーケード街は、いい位置にある。東は五島への船の玄関口であるターミナル、南には市立総合病院（旧海軍病院）、西に市役所、北側に住宅地、さらに市場。往き来する人がつねにアーケードを通つていく。品揃えに力をいれ、日曜日にも「全力で営業」したくなるというものだ。その上でたえず「街角ライブ」といった催しを仕掛けていく。往来と街を店先と結びつける工夫をたやさない。

「四ヶ町アーケード」とななめにくつつく

かたちで戸尾市場とのおがのびている。

海産物・珍味・中林鯨商店

卸・小売 昆布専門店 小手川商店

鶏肉専門店 とり新

さつまあげ 山崎

長崎県銘産海産物専門店 松尾食品店

トータルファッション ハトヤ衣料

おしゃれ専科紳士服 ハトヤ

……

総数およそ五〇軒。アーケードの店を大とすると、こちらは中クラス。「トータルファッション」や「おしゃれ専科」はふた昔も前の流行語だと思ふのだが、当市場ではレッキとした現役である。本家と分家かもしれないハトヤさんがべつべつのところであるばっている。

この市場と背中合わせにのびるのが「とんねる横丁」で、市場の中クラスに対して横丁組は小クラス。刃物専門、ホルモン店、おでん・蒲鉾店、果実店、焼鳥、揚げ物の九天屋……こちらの総数二〇あまり。

なんともフシギな界限である。往来に面してマツチ箱を横に並べたようにつづいている。市場と合わさるところに石段があつて、のぼっていくと広々としたグラウンドに出た。

「……?」

キツネにつままれたぐあいだった。ひし

めき合った商店の上は大空のはずが、そこにグラウンドがひろがっている。よほどあつけにとられた顔をしていたのだろう。石段に來あわせた人が教えてくれた。もともとは小学校と運動場だった。運動場のはしが台地の切れ目でガクンと落ちていく。岩盤なのを利用して戦争中に防空壕が掘られ、戦後は穴が一つ一つ商店になり、「とんねる横丁」の名がついた。トンネルとはいえ、すぐに「ドンと壁になる」そうだ。

大通りの陸橋からながめると、「とんねる横丁」と戸尾市場と「四ヶ町アーケード」が三叉路にのびるぐあいになっている。大・中・小の商店スケールに応じて扱う品もちがえば商法もちがう。

「佐世保にここだけ あじすば 一本一六〇円」

「クラゲとごろ入り天プラ 美味しかよ」
マーケットタウンには土地言葉が幅をきかせている。佐世保でここだけという「あじすば」、菓子屋の「あん入りコーサコ」、昆布売り場に見る「ません婆」とは何であるか? アーケード街ではオペラや街角ライブのお誘いだつたのが、市場では地元サッカーチームの応援のよびかけ。「とんねる横丁」には画家が主人の店もあるようで、ドアがそのまま超タテ長のカンバスになり、

目の大きな美女がやさしくほほえみかけてきた。

ふつう、長崎県の佐世保といえばハウステンボスだろう。

「30万本の季節の花が咲き、40万本の木々が繁る、152haの広大な街」

佐世保湾の対岸にあたる半島の根っこにオランダ町がつくられた。「ドムトールン」という名の塔、運河沿いに三角屋根のレンガの家並み、オランダの女王の宮殿もあれば、アムステルダムのお宿ホテルと同名のホテルもあって、アムステルダムと同じように専用クルーザーで運河から入っていける。風車のまわる花園にチューリップが咲き乱れ、六〇〇台収容の駐車場完備。

いかにも人工樂園さながらだが、だからといって人が訪れるとはかぎらないのではあるまいか。巨額の資本、ハイテク土木、情報産業を動員しても、「自然を創造し、育む」森の家、「ハウステンボス」が、つねに春を迎えられるかどうか。

というのは人間はいたって飽きっぽいイキモノであって、どんなに目新しくても、すぐに飽きるものだし、また人工の「自然」は、目新しさを追うしかないからだ。さらにコンピューターのパログラムを取り代え

る式の目新しさは、しょせんはコピーであって、「自然を創造し、育む」から、かぎりなく遠いからだ。

ハウステンボスを本当に生かすための知恵と方法は、まさに地元のアーケードと、市場と、とんねる横丁の三叉路にひそんでいるのではなからうか。ここでは季節ごとに季節の風が吹き、月ごとに「全力で営業」の店が入れかわり、日ごとに知恵をしぼった新製品がおめみえする。人は「食べてみんな」の声にさそわれ、「美味しかよ」と帰っていく。

地元の業者によ





るホテルを選んだのは正解だった。笑顔がマニユアル的でなく、何かにつけて心くばりが親身である。エリアの催しの後見役であって、チケットをはじめとして、さまざまに協力している。

「四ヶ町アーケード」と「三ヶ町アーケード」をつづいているにもかかわらず一本としないうのは、微妙な差異があるからだろう。四ヶ町から三ヶ町に入ると、ほんのちよつぱり熱気がうすれる。そもそも町のスケールに適正な商店街の大きさがあるものだ。佐世保市の規模からすると四ヶ町筋で十分にまに合う。これを七ヶ町アーケードにすると、共倒れを起こし、「テナント募集」がまじりこみかねない。

大・中・小の多様さをそろえたエリアに欲ばりは禁物なのだ。

明敏な佐世保市民は、そのことをよく知っている。「三ヶ町アーケード」にカラー写真の看板が掲げてあった。

WE LOVE SASEBO ——新しい街づくりにご期待下さい

高齢者住宅、業務施設、共同住宅、中央公民館、店舗、駐車場をそなえた市街地につくりかえる。坂の町佐世保では、トシをとると高台の家では暮らせなくなる。その人たちが病院も近い市中にもどれば、商店街に新しい顧客ができる。あざやかな転身プランというものだ。

アーケードの裏手が夜店公園で、食べ物屋、飲み物屋が軒をつらねている。そのまた裏手の川を渡ったところが公園で、テーブルつきの長椅子を三人、五人のグループがかこんでいた。よく見ると皆さん、弁当、デザート、飲み物も持参で、交換も自由、リバーサイド・サロンというものだ。

にぎやかな会話を洩れ聞くところによると、市街再開発組合が街づくりプランを募集中で、あれこれと意見が出ていた。いずれリバーサイド・サロンの名案が、新アーケードにおめみえするにちがいない。

(いけうち おさむ)



連載Ⅱ 風土燦々⑨

町住みのリアル・ハンター（後編）

静岡県浜松市天竜区

ルポライター 飯田 辰彦

秋、天竜川での川漁が一段落すると、二俣町の川漁師、片桐邦雄さんは漁師から猟師への「衣更え」をする。狩猟の解禁は十一月十五日である。初猟のこの日と終猟の二月十五日の二日間に限り、片桐家と一族で狩猟免許を持っているメンバー全員が参加して、カモ猟に出かける。

片桐家からは片桐さん本人と長・次男、長男尚矢さんの嫁である亜希さん、この四人に加えて亜希さんの実家の父である山本一正さん、さらに片桐さんの長女淳子さんとその嫁ぎ先の夫と義父が馳せ着ける。時に、片桐さんの実兄の啓助さんや甥、までやってくる。猟場は天竜川で、川舟を使って水面に浮かぶカモに近づき、散弾で次々に射止めていく。十人近い猟師が一艘の川舟に同乗する図は、いかにも迫力がある。

これに引き換え、罾による山の猟は実に地味なもので、基本的に片桐さん一人の

単独猟だ。地味とはいっても、この罾猟に片桐さんの経験と技術のすべてが込められており、そこに紛れもなく日本の狩猟文化の粋を見ることが出来る。私はこれまで九州の山岳で長く狩猟の取材を続けてきたが、片桐さんの罾猟を目の当たりにして、過去の体験が瞬時に色あせるのを感じたほどだった。

片桐さんが使う罾はいわゆる「括り罾」に分類されるもので、彼自身はその形状から「弁当箱」と呼んでいる。市販の罾からヒントを得て、それに徹底した改良を加え、まさに「片桐式」とも言える括り罾に仕立てている。罾の細かな説明は省くが、要はイノシシ（以下、シシ）もしくはシカがこれ（弁当箱）を足で踏むと、そこに回してあるワイヤーがバネの力で一瞬にしてギユツと締まり、獲物の足首を捕らえる仕組みになっている。括り罾の中でも、これ

は胴括りではなく足括りの一種ということになる。

罾猟の猟場は旧天竜市から旧引佐町（現浜松市北区）にかけての里山で、場所によっては民家の目と鼻の先の雑木林に罾を仕掛けることもある。静岡県西部のこの辺りは、いわゆる天竜林業地の南端に位置し、山はほとんど針葉樹に埋め尽くされているため、野生動物たちは餌を求めてやむなく人里近くに出没する。

「もう何十年も前から動物と人間のいたちごっこが続いています。動物たちに責任はないのです。畑を荒らされたくなかったら、彼らに戻る森を確保してあげなければなりません。この惑星は人間だけのものではないんです」

片桐さんの持論である。それはさておき、罾の見回りには、毎朝遅くとも八時には家を出る。この日（十二月半ば）も天竜川右



70キロのシシを生け捕りにした瞬間。まさに命懸けの猟法だ

岸に近い罾場から回りはじめ、ちょうど半分ほど巡回を終えたところで、片桐さんが「あれ、ひよつとして……」と言いながら、ジムニーを停車させた。そこは、谷川を隔てた対岸の杉林の中に罾を仕掛けた場所だ。双眼鏡で黒々とした塊を改めて確認すると、紛れもなくシシの背中だった。

罾場に駆けつけると、うずくまっていた

シシはやにわに身を起こし、鼻息を吹かせて我々を威嚇する。「七〇キロくらいかな。雌ですね」と見切ったところで、片桐さんはいよいよシシの捕獲に入る。片桐さんの猟はすべて、生け捕りのため、ここからが腕の見せどころとなる。むろん、毎回が命懸けだ。私が片桐さんのことを別格の猟師と言ってはばからないのは、まさにこの生け捕りという猟法に対する彼のこだわりを知ったからにはほかならない。

「ほかの猟師からは、なぜそこまで危険を冒してシシを捕るのか、と笑われます。でも、肉質のことを考えたら、これが最上の捕り方ですから……。すべてお客さんに供する肉だからこそ、私は生け捕りにこだわるんです」

この説明には補足が要る。生け捕りにしたあと自宅の解体場まで持ち帰り、そこで獲物に完璧な「失血死」を施して初めて、片桐さんが考える生け捕りは完結する。「生け捕り↓失血死」という手順を踏むことで、一切獣臭のしないジビエが手に入ると分かるには、また長い試行錯誤の歳月を必要としたのである。解体については、いずれ稿を改めたい。

さて、荒ぶるシシの捕獲は、片桐さんが自ら開発した「鼻取り」を使って、捕らわれた一本の足に加えてもう二つ支点を作ることで、見事に達成される。とはいえ、シシの動きを止めたあと、森に響き渡る悲鳴を上げるシシに馬乗りになり、ガムテープでまず目隠しをし、さらに四本の足をまとも縛り上げる芸当は、見ているだけでも背筋が寒くなる。

十一月十八日のシシの初猟からちょうど二十日、これが片桐さんが今シーズン捕った獲物の三十頭目（うち五頭がシカ）だった。毎シーズン、猟期の終わりには八十〜九十頭に達する数からすれば、これで平均的なペースであるらしい。今、日本の山ではツキノワグマの絶滅が危惧されている。しかし、九州と南アルプス山麓の狩猟を長く追いかけてきた私の目には、ツキノワグマとほぼ同じ状況がシシにも迫っているのがはっきり見える。

針葉樹の森でも生きられるシカとは異なり、雑木山でしか生きられないシシにとつては、現在の日本の山はそのどこにも生存の可能性が残されていない。絶品のシシのカルビをつつきながら、この国の「野生」の行く末に思いを巡らせた。

(いいだ たつひこ)



連載Ⅲ
ホスピタリティーの
手触り57

インターネットと宿

旅行作家 山口 由美

***** ネット予約の 功と罪

宿を予約する時、インターネットによる比率が上がっているという。宿の側からすれば、空室状況によって、料金やプランなどをリアルタイムに変えて集客することができるし、予約をする側にしても、好きな時間に空室や料金を確認して予約できるのは便利である。気がつけば、私も大抵、宿の予約はインターネットを通してしている。

地球の裏側の小さな宿と思わぬ出会いができるのも、インターネットのなせる業だ。先日、タンザニアで泊まった、マウント・キリマンジャロ・ビュール・ロッジという宿との出会いが、まさにそうだった。

私は、キリマンジャロの山のおもとで、山の眺望が美しいロッジを探していた。でも、ガ

イドブックでは大した情報が得られない。そこで、インターネットで「キリマンジャロ／眺め（ビュール）／ロッジ」とキーワードを入れて検索してみたことにした。すると、トップに出てきたのが、マウント・キリマンジャロ・ビュール・ロッジだったのである。

なかなかよくできたホームページで、写真もたくさん掲載してあった。決め手となったのは、宿から撮影したキリマンジャロの写真だった。そして、オーナーの顔写真。地元チャゲ族の文化を生かしたエコツーリズムを実践するために開業したという彼の言葉と、顔写真の表情が何となくつながって、私は背中を押されたのだった。

インターネットの予約は、便利で手軽な半面、少しの不安がつきまとう。それが地球の裏側の、キリマンジャロの山麓で、ネット上でしか存在が確認できないとなれば、

なおさらだ。しかし、その不安は、予約を受ける宿でも同じことで、とりわけ空港が遠いマウント・キリマンジャロ・ビュール・ロッジでは、空港に車で迎えにいったノーショー（連絡なしの宿泊）だった時には、泣くに泣けなかったという。それで予約時に百USDのデポジットを取ることにしたのだからだ。

その日、約束の空港で私たちは待っていた。たまたまフライトが予定より早く到着してしまい、少しの不安が大きな不安になるうとしていたころ、ホームページで見覚えのある顔が待合室にやってきた。

「フィリップ！」
ネット上でしか会ったことのない私たちは、旧知の友人のように抱き合った。

果たして、マウント・キリマンジャロ・ビュール・ロッジは、いい宿だった。部屋は清



夕刻、ロッジからキリマンジャロの雄姿を望む

潔で熱いお湯が出たし、食事も、ごちそうは何もないが、悪くなかった。そして、何よりも村を挙げて一生懸命にもてなしてくれる、その気持ちがうれしかった。

キリマンジャロの山麓は、有名なコーヒーの産地である。ロッジのある村も、コーヒー

栽培で暮らしてきた。ところが、近年、コーヒーの国際価格が下落して、コーヒーでは生活が成り立たなくなった。そのため、花や野菜の栽培に転業する農家が多いという。ふもとの町で旅行代理店を営んでいたフィリップは、出身の村に現金収入をもたらすため、

ロッジを開業することにしたのだ。

すべてが手作りの宿だった。宿泊客に見せるものは、山と雪解け水を集めた滝と、コーヒーの木と畑と、村人の生活しかない。観光は徒歩。雨が降れば、たき火を囲んで語り合う。

でも、自分たちの土地を誇らしげに見せる彼らの笑顔は、輝いていた。そこにあつたのは、必然として生まれた、真正正銘のエコツーリズムだった。

チャゲ族は、キリマンジャロの山麓で古くから暮らしてきた誇り高き部族だ。いくつもの方言があるというが、フィリップの村の言葉で、「キリマンジャロ」は「私たちの山」を意味すると教えてくれた。

キリマンジャロの白き峰を「私たちの山」として指さす時、彼ら

の表情は、ひとときを誇らしげになる。

インターネットがなかったなら、そんな村の人々と会うこともなかったかと思うと、私は不思議な思いにかられる。

顔が見えないインターネットでのやり取りには、確かに功と罪がある。ある老舗ホテルでは、インターネットの予約が増えたことで、若いスタッフが昔からの顧客を大切にしなくなったと嘆く。顧客との付き合いに心を配るより、インターネットで日々の予約を埋めるほうが簡単だからだという。

それでは本末転倒ではないか。インターネットとは、地球の裏側に宿の存在を知らせ、新たな顧客を生むツールなのであつて、日々の業務に人間的なぬくもりを失わせる道具になつてはならない。

インターネットの予約は事務的で無機質というけれど、私とフィリップのやり取りは決してそうではなかった。私たちは、何度もメールをやり取りして、お互いの人柄を探り合っていたように思う。そして、顔は見えないけれど、相手のことを信用して、私はデポジットを支払い、フィリップは遠い空港までの車を用意した。だからこそ、私たちは、初めてなのに、旧知の友のように空港で抱き合ったのである。

(やまぐち ゆみ)

旅の図書館
新着図書紹介

日本の空を初めて航空機が飛んだのは、一九一〇年(明治四十三年)のことだった。

東京の代々木練兵場で陸軍の大尉がフランス製アンリ・ファルマン複葉機とドイツ製ハンス・グラーデ単葉機の飛行に成功したのは、この年の暮れも押し詰まった十二月十九日。来年は、日本における初飛行から百年目を迎えることになる。

その記念すべき節目を前に「航空」という角度から日本の戦後史を見つめ直してみようという『ヴィンテージ飛行機の世界』(鈴木真二監修 夫馬信一編著、PHP研究所)は、珍しい写真や図版を活用することで、歴史に埋没しかなない貴重な事実を後世に伝えたいという監修者や編著者の熱意が感じられる力作だ。

明治末期に幕を開けた日本の航空史ではあったが、敗戦によって日本国内では飛行機を製造することも、航空機の操縦や定期便を運航することも禁止され、いわゆる「航空ゼロ」の時代がしばらく続く。

しかし、サンフランシスコ講和条約が発効した一九五二年(昭和二十七年)には、米軍に接收されていた羽田飛行場が日本に返還され、国内定期航空運送事業免許を取得した日本航空が同年十月、東京／札幌線など六路線での自主運航を開始することになる。

本書では、その後の航空の歩みを「復興時代」「発展時代」「先進時代」「再編時代」という四つの章に分け、それぞれの時代を支えた航空機の技術進歩とともに振り返る。

各章の随所に挿入された見開き二ページの「ヴィンテージ飛行機図鑑」では、ダグラスDC3や国産のYS11、大量輸送時代の幕開けを飾ったDC8やボーイング727、さらには、一九七〇年代以降の海外旅行大衆化を担ったボーイング747やロッキードL1011、DC10など、航空史に大きな足跡を残した名機が写真と図版で詳細に紹介されている。当時を知るオールドファンだけでなく、若い世代の読者にも興味深いものに違いない。

航空機の製造解禁から五年後の一九五七年(昭和三十三年)に(財)輸送機設計研究協会が設立されたことに端を発したYS11の開発プロジェクトは、一九六二年(昭和三十七年)八月の試作1号機初飛行を経て、一九六五年(昭和四十年)には当時の東亜航空が初の国産実用機として定期路線に就航。国際的にも高い信頼性で評価された。

一九六〇年代に入ると、DC8とボーイング727が相次いで日本の空に登場し、航空の世界にも大量輸送時代が到来する。

一九六六年(昭和四十一年)に来日したビートルズがアンカレッジ経由の日本航空を利用し、羽田空港で飛行機を降りる際にJALのロゴ入り法被姿でタラップに登場した映像や写真は有名だ。

今年七月には、日本航空がボーイング747-300型の運航を終え、全日空でも同型を退役させていることから、「クラシック・ジャンボ」は日本の空から姿を消した。

一世を風靡したジャンボ機も、過去のものになろうとしている今、この本に「消えゆく航空の昨日」を刻みつけたかったと、編著者はあとがきに記している。

航空機が大衆的な交通手段となる一方で、「過去の航空にあった『特別な何か』が失われてしまったことは否めない」という編著者の指摘は、同時代を生きた多くの関係者が共有する思いかもしれない。(挑全)



B6判変型並製 204ページ
定価 1,400円
PHP 研究所

■旅行年報2009 最新刊

直近一年間の旅行・観光市場にまつわるあらゆる出来事について、数多くのデータ・資料をもとに分析。日本人の国内・海外旅行、外国人の訪日旅行、観光産業、国内観光地、観光政策など、さまざまな角度から旅行・観光市場の現状を一望できる一冊。○九年九月発行。

■旅行者動向2009 最新刊

国内・海外旅行者の意識と行動について毎年実施している当財団独自調査の分析結果をビジュアルに解説。○九年八月発行。

■Market Insight 2009

(日本人海外旅行市場の動向) 最新刊
日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。当財団独自調査。日本語版、英語版あり。○九年七月発行。

■観光実践講座講義録 最新刊

地域主体の観光、新しい時代の価値観を地域から発信する、

毎年十一月に実施している二日間の講座講義録。平成二十年度の講師は、浜名湖えんため代表・稲葉大輔氏、前安塚町長・観光カリスマ・矢野学氏、元紀南振興プロデューサー／有限会社伊勢福祉社長橋川史宏氏、田野畑村役場・渡辺謙克氏、東北観光推進機構教育旅行アドバイザー／観光カリスマ・小椋唯一氏。○九年三月発行。

※当財団出版物のご注文はホームページからお願ひします。
担当・財団法人日本交通公社 観光文化事業部

電話 03・5208・4704 <http://www.jtb.or.jp>



次号予告

「フットパス」とは、イギリスが発祥地で森林や田園地帯、古い街並みなどの風景を楽しみながら歩く小径。次号はフットパスの意義や国内での取り組み状況について特集します。

調査研究だより

●近年、自然観光資源の保護に配慮しながら、ふれあい、学び、知るといふ新しい観光の形である「エコツーリズム」が注目されています。最近では、二〇〇七年に制定された「エコツーリズム推進法」によって、地域の取り組みを国がバックアップする総合的な枠組みが定められ、二〇〇九年九月には、埼玉県飯能市において里山の自然や文化、歴史を対象として実施されているエコツーリズム推進の取り組み（全体構想）が、同法に基づく第一号の認定を受けました。

●このように、わが国で進められているエコツーリズムは「原生的な自然を有する地域」だけでなく、自然とそこに暮らす住民の生活文化が共存する「里地里山の環境を有する地域」でも成立し得る、という考え方が特徴であり、それだけに、今後も全国各地で取り組みが拡大することが見込まれます。

●当財団では、環境省を中心として実施されているエコツーリズム推進のための関連施策について、「普及啓発」や「法の施行支援」といった内容でさまざまな調査研究や事業支援を行ってきています。今後もこれまでの経験や知見を生かし、エコツーリズムのさらなる定着に向けてお役に立てよう努力していきたいと思ひます。

(菅野)

編集後記

◆大和は国のまほろば。奈良盆地の東南地域をもととの本拠地としていた大和王朝は、律令国家の体裁を整えわが国で初の本格的な都として平城京を造営し、西暦七一〇年に藤原京から遷都しました。明年は平城京遷都千三百年を迎えます。本号では、わが国の礎となつた平城京の意義を問い、未来への指針を探ります。

◆平城京のシンボルの存在は東大寺大仏。時の聖武天皇は、世の混乱、自然災害、病氣、飢饉に悩める人心を一つにし、そのきずなの上に人々の幸せと平和の実現を願つて大仏造立を発願されました。大仏の開眼供養会は西暦七五二年に執り行われ、開眼導師はインド出身の僧・菩提僊那(ぼだいせんな)が務めました。

◆平城京は国際交流都市として大陸から進んだ文化と技術も受け入れ、天平文化が豊かに花開きます。その精華は本年、第61回を迎えた正倉院展で目にすることができまふ。悠久の歴史を超えて当時の一流の文物・美術工芸品に接することのできる幸せを感じまふ。

◆「平城遷都1300年祭」は平城京の意義を再認識し現代にやみがえらせようとする試みと思ひます。国際的緊張に包まれ混乱にあえぐ今日、「日本のはじまり」に注目し学び、明日の日本を考えることは真に意義深いと思ひます。

(宇八)



観光文化 第198号

第33巻6号通巻第198号

発行日 2009年11月20日

●
発行所：財団法人 日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第1鉄鋼ビル
〒100-0005 ☎ 03-5208-4701
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第2鉄鋼ビル 旅の図書館内
〒100-0005 ☎ 03-3214-6051
<http://www.jtb.or.jp/library/>

編集人：外川宇八
発行人：新倉武一

●
印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554